

## 太宰治『斜陽』論

——かず子と「蛇」をめぐる——

『斜陽』は敗戦の翌々年、昭和二十二年七月から十月まで『新潮』に連載された作品で、三十歳頃の女性、かず子の手記形式が取られている。『斜陽』の中で時代性を越えて鮮やかなのはかず子の母だけ<sup>(1)</sup>といったのは三好雄氏であるが、それから二十余年が経ている現在、今なお時代性を越えて鮮やかなのはかず子だけである、と私は言いたい。

これまでの『斜陽』論は「死の四重奏」<sup>(2)</sup>、「四人四様の滅びの宴」<sup>(3)</sup>を中心とする「滅び」の物語とする論と、かず子の「生き方の革命を高唱する主体的な意志」<sup>(4)</sup>の物語とする論、ないしは、それをあわせて「没落への挽歌」と「かず子の再生」<sup>(5)</sup>を中心とする「滅び」と「再生」の物語とする論がほとんどである。要するに「滅び」と「再生」という二つの枠から基本的には抜け出ていないと思われる。しかし、一九九〇年代に入って、もう一つの視点が提出されてい

孫 才 喜

る。「《出来事》と《語り》」のずれとその相互作用に注目し、かず子の「革命」という言葉を手に入れたという点にこそ、意味の中心<sup>(6)</sup>があると高田知波氏の見方をはじめとして、「この物語を構成するエピソードが記述される時間と、それを再び写し取る現在との間に断層」を見る和田季絵氏<sup>(7)</sup>、また「語る行為についてのテキスト」<sup>(8)</sup>として読む榊原理智氏の論などがそれである。これらは手記の書き手としてのかず子と、その手記のなかのヒロインとしてのかず子を措定し、小異はあるとしてもその両者の関係性のありかたから『斜陽』を読もうとする試みである。

本論ではこういった物語構成論的な観点を踏まえて、手記の書き手であるかず子の「手記」、その物語の生成過程に焦点を合わせ、かず子の「恋と革命」の本質を探りたい。とくに『斜陽』のなかには蛇に関わる言説が頻出しているが、それについては未だ十分に論

じられていない。この蛇の言説には、かず子の内面の屈折した心理が微妙に反映されており、物語の展開とテーマの形成に深く関わっていると思われる。

## 一

### 1 二つの蛇の事件

八章から成る『斜陽』は、かず子の手記形式が取られており、書き手のかず子は出来事が起こった後にそれを語っていく。そこには手記を書き記す行為をも含んだ現在の時間と、じっさいに出来事の起きた過去の時間という二重の時間層が存在する。したがって出来事の時間と語りの時間のあいだに、かず子の物語の構成力が作用しているのは確かである。このことからかず子の手記において、その最初の回想が「蛇」に関わる事件である点に注目したい。第一章で早々と語られる蛇に関わる語りは、最後の第八章までいろいろな形で見られ、さまざまな意味合いをもつようになっている。

第一章と第二章は「蛇の卵」の事件を軸にして語りが進められている。まず第一章で「けさ」という時点で、母との朝食のことから書き出すかず子は、すぐに何日か前の「蛇の卵」の事件を回想し、さらに十年前の父の臨終時の蛇のことの回想へ移っていく。そして再び「けさ」に戻って、朝食の後の蛇の事件を語るが、この日、かず子は庭で「朝」と「午後」、「夕方」、三回も蛇を見ており、それ

について詳しく語っているのである。

蛇の話をしようかしら。その四、五日前の午後に、近所の子供たちが、お庭の垣の竹藪から、蛇の卵を十ばかり見つけて来たのである。(略)三十分ばかり火を燃やしてめたのだけれども、どうしても卵は燃えないので、子供たちに卵を火の中から拾はせて、梅の木の下に埋めさせ、私は小石を集めて墓標を作つてやつた。

「さあ、みんな、拝むのよ。」

私がしやがんで合掌すると、子供たちもおとなしく私のうしろにしやがんで合掌したやうであつた。(二二―四頁)

かず子は子供達が見つけてきた蛇の卵を焼こうと提言したが、なかなか燃えないため、卵を埋めて墓標を作つてやるのである。「蛇の卵」のため墓を作ることから、蛇が死んだ人間と同様に扱われているのがうかがわれる。埋葬し、墓標をつけることは人間社会の特有の風習である。また死者や仏、神などにしか行わない「拝み」、「合掌」という行為が「蛇」にも用いられている。蛇を拝むことは日本の民間信仰として古くから行われていることである。蛇への信仰は一般に古代エジプトから発祥し、中近東、インド、アジアなど

の地域に広く伝えられたとも言われているが、とにかく日本の民話などの昔の民間伝承にもよく見られる。

かず子自らが「蛇の卵」の事件と命名づけるこの事件は、手記の全体から見ると、かず子の回想において最初に位置するものであり、後にかず子の蛇への志向、あるいは「蛇」化する現象を引き起こす現実的な材料として用意されたものと考えられる。そしてこの「蛇の卵」の事件は、かず子のなかで十年前の父の臨終時の回想と直接に結ばれていく。

お母さまは決して迷信家ではないけれども、十年前、お父上  
が西片町のお家で亡くなられてから、蛇をとても恐れていらつ  
しやる。(略)けれども、そのお父上の亡くなられた日の夕方、  
お庭の池のはたの、木といふ木に蛇がのぼつてゐた事は、私も  
実際に見て知つてゐる。(略)隣の木犀にも、若楓にも、えに  
しだにも、藤にも、桜にも、どの木にも、どの木にも、蛇がま  
きついてゐたのである。けれども私には、そんなにこはく思は  
れなかつた。蛇も、私と同様にお父上の逝去を悲しんで、穴か  
ら這ひ出てお父上の霊を拜んでゐるのであらうといふやうな気  
がしただけであつた。(一四—一五頁)

父の死際、父の枕元にあらわれた「細い黒い紐」のような蛇を見

てから、母は「蛇をとても恐れ」るようになる。そして父の死際の蛇の事件と「蛇の卵」の事件、「この二つの蛇の事件が、それ以来お母さまを、ひどい蛇ぎらひにさせたのは事実であつた。蛇ぎらひといふよりは、蛇をあがめ、おそれる、つまり畏怖の情をお持ちになつてしまつた」のである。

一方、かず子のほうは、木の枝に巻きついてゐる蛇の様子を死者を拜んでいると意識し、自分と同質的なもののように感じ取っている。「蛇も私と同様にお父上の逝去を悲しんで」いることには、「蛇」に死者への悲しみという人間的感情が与えられ、「蛇」が擬人化されており、「蛇の卵」の事件における「私」が「蛇の子」を拜むことと、「蛇」が「私の父」を拜むことは互いに呼応している。「蛇も私と同様に」には、「蛇」と「私」との距離が狭くなり、一体化していく兆しがあらわれているといえよう。日本の民間伝承における蛇は、人間の本来の姿とされ、蛇が祖霊として信仰されてきている。また蛇が人間になったり人間が蛇になったりするのによく見られる<sup>(9)</sup>。

かず子の蛇に対する親近感や同質感は、このような日本の民間信仰と通じるところがある。かず子は蛇との同質感を抱きはじめ、次第に自分の中に「蝮」を宿す方向へと進むことになる。ここでかず子が「蛇」を身内に宿すことは、すなわちかず子とその内面に蛇によつて象徴される属性をもつ存在になっていくことを意味するので

ある。

## 2 かず子と蛇

「蛇の卵」を焼いてしまい、「あくる日も、またそのあくる日も忘れる事が出来ずにゐた」かず子には、「けさ」庭に現れた蛇がその「卵の母親」と思われ、子供を捜しているという推測に至る。さらにかず子はその「女蛇」の姿から「物憂げ」な様子を感じ取っている。じっさいの蛇がどうであつたかは別として、かず子がその蛇に「物憂げ」という人間的な感情を与えていることが重要だろう。「女蛇」に対してかず子が同質感を抱いたことを見ることが出来る。その「物憂げ」の感情はかず子自身のものでもあつたのである。すなわち「物憂げ」な「女蛇」には、子供を死産したかず子自身の姿が投影されている。そこには子の喪失という両者の共通点によって、引き起こされた悲しい情感が読みとれる。ここに至つてかず子と「女蛇」とは同じ運命に置かれたものとして、より密接に結ばれている。「女蛇」が「彼女」という三人称で擬人化されていることからも「女蛇」とかず子自身が同格化されているといえる。蛇は、母においては客観的な信仰の対象としかなつていないのに対し、かず子においては次第に内面の世界に潜り込んでくるのである。

夕日がお母さまのお顔に當つて、お母さまのお眼が青いくら

ゐに光つて見えて、その幽かに怒りを帯びたやうなお顔は、飛びつきたいほどに美しかつた。さうして、私は、ああ、お母さまのお顔は、さつきのあの悲しい蛇に、どこか似ていらつしやる、と思つた。さうして私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇を、いつか、食ひ殺してしまふのではなからうかと、なぜだか、なぜだか、そんな気がした。(二七一—八頁)

ここでは「お母さまのお顔」が「悲しい蛇」に喩えられている。「お母さま」を「卵の母親」としての「女蛇」にたとえる表現には、母の息子である直治の死が暗示されている。一方、かず子は自分を「醜い蛇」として設定することにより、子に死なれて悲しむ「女蛇」と悲しみ深い母との両者から自分を差異化していることが見られる。ここで「醜い蛇」である「私」と「美しい母蛇」としての母との対峙が生じてくる。とくにこの「醜い蛇」はただの蛇ではなく「蝮」である。毒をもつ蝮は毒を持たない普通の蛇よりも一層生命力の強い存在と見なされる。そして「醜い蛇」の「私」はその「美しい母蛇」の母を「食ひ殺してしまふ」ような強い予感を抱くのである。「蛇の卵の事があつてから、十日ほど経ち、不吉な事がつづいて起り、いよいよ「私が、火事を起しかけたのだ」と、二つの蛇の事件の延長線にかず子の火事の事件が位置づけられている。用心不



足で火事を出してしまい、「おひめさま」のようであった自分を反省し、なお「ゆふべの事は、ゆふべの事。もうくよくよすまい」と、翌日から畑仕事にでていくかず子の姿には、雨降って地固まるというような強ささえ感じ取られる。

私は翌日から、畑仕事に精を出した。下の農家の中井さんの娘さんが、時々お手伝ひして下さった。火事を出すなどといふ醜態を演じてからは、私のからだの血が何だか少し赤黒くなつたやうな気がして、その前には、私の胸に意地悪の蝮が住みこんどは血の色まで少し変つたのだから、いよいよ野性の田舎娘になつて行くやうな気分で、お母さまとお縁側で編物などをしてゐても、へんに窮屈で息苦しく、かへつて畑へ出て、土を掘り起したりしてゐるほうが気楽なくらゐであつた。(三八頁)

このようなことを意識したかず子は、「醜い蛇」としての自分の存在に対する自覚が強まり、自分の「体の血が何だか少し赤黒くなつたやうな気がし」、「野性の田舎娘になつて行くやうな気分」になる。かず子の内面には自然の生命力が充滿し、高まつていくのである。蛇は獲物を食うことによつて生存の維持、脱皮、繁殖を図る。そのような本能をもつ蛇を内在化したかず子にとって、「母」の老いや衰弱が自分の成長や生産に繋がることを自然に思うようになつ

てゆく。

一方、戦争時を回想して「本当に、いま思ひ出してみても、さまざまの事があつたやうな気がしながら、やはり、何も無かつたと同じ様な気もする」かず子が唯一、語りたいことは、動員されて「ヨイトマケをやらされた時の事だけ」である。それは華族のかず子が経験することのなかつた「筋肉労働」が出来たということにほかならない。貴族の家の没落と残された母と直治の衰微のなか、平民として生き延びようとするかず子には、その労働の経験こそが今に役立つ唯一の「貴重なる体験談」だったのであるまいか。ここには過去を回想する際の、手記の書き手のかず子の現在の意向が読み取れる。

伊豆の山荘で母と「わびしい生活をはじめなければならなくなつた」かず子は、山荘の座敷で自分の「お乳のさきに水平線がさわるくらゐの高さに」、静止しているやうな海を見いだした。それ以後蛇との同一感をもつことで生命力が高まつてくるかず子は、青年期の過ぎた「中年の女」になつた自分に気づき、「やりきれない淋しさに覆はれ、外を見ると、真昼の光を浴びて海が、ガラスの破片のやうにどぎつく光つてゐる海を発見する。また母の臨終の前にして「悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明かりの気持」のなか、かず子はまた「胸の高さに光つてゐる海を眺め」、「私はこれから世間と争つて行かなければならないのだ」という自覚とともに決意

を強くするのである。この光っている「海」は、かず子が引越の日に見た、静止しているような海とは違って、動揺し、生動している海である。かず子の「胸」と生動する「海」との連関づけに、かず子の高揚する生命感があらわされている。

私はお前を知つてゐる。お前はあの時から見ると、すこし大きくなつて老けてゐるけど、でも、私のために卵を焼かれたあの女蛇なのね。お前の復讐は、もう私よく思ひ知つたから、あちらへお行き。さつさと、向うへ行つてお呉れ。

と心の中で念じて、その蛇を見つめてゐたが、いつかな蛇は、動かうとしなかつた。私はなぜだか、看護婦さんに、その蛇を見られなくなかつた。(略)蛇を見てから、私は、悲しみの底を突き抜けた心の平安、とでも言つたらいいかしら、そのやうな幸福感にも似た心のゆとりが出て来て、もうこの上は、出来るだけ、ただお母さまのお傍にゐようと思つた。(一一八頁

—一九頁)

臨終の母から「蛇の夢」の話聞いたかず子は、じっさい「卵を焼かれたあの女蛇」をその場で発見する。母の死はこの「女蛇」の復讐と見なされるが、蛇の祟りは民間信仰でよく知られていることでもある。かず子はこの「女蛇」を見て、やがて母へのあきらめが

生じるとともに、父の死際の黒い蛇を想起する。また、かず子がその蛇を他人に見られるのをはばかることから、その復讐する「女蛇」に母を食い殺す自分とを重ね合わせていることがわかる。この「食ひ殺し」という加害行為には、動物の残酷さや生存競争などを連想させるが、同時に受身的な存在から能動的な存在へ変身していくかず子が暗示されているともいえよう。

蛇は様々な象徴的意味をもっており、神靈、創造と破壊、両性具有、不死、野性の力の象徴で、全宇宙的なエネルギーをあらわしている<sup>(10)</sup>とされる。それは人間的な善悪の枠さえ越えてしまうものである。そしてかず子も社会的な倫理や善悪などを越えたところに、自分の場所を見いだそうとしているのである。かず子は「女蛇」を見て、「悲しみの底を突き抜けた心の平安」、「そのやうな幸福感にも似た心のゆとり」が生じてくる。母は貴族の没落や社会的変化以降も依然として貴族として旧倫理道德の側にいて、それゆえにかず子の再生にのしかかっている重荷となる存在である。それは母に復讐する「女蛇」に同化することで、かず子が心の平静と幸福を得られたことから明らかである。したがってかず子にとって母の死は、これまで引きずっていた貴族的なものや旧倫理道德との決別を意味し、母との別離の悲しみの一方で解放的な心情をももたしたのである。

生きるといふ事。生き残るといふ事。それは、たいへん醜く

て、血の匂ひのする、きたらしい事のやうな気もする。私は、みごもつて、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思ひ描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残つて、思ふ事をしとげるために世間と争つて行かう。お母さまのいよいよ亡くなるといふ事がきまると、私のロマンチズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに変つて行くやうな気分になつた。

(一二二—一二三頁)

これは母の死の直前、かず子が後に残される自分のことを想像しての述懐である。生きていくことの厳しさと過酷さを自覚しているかず子は、それと真に向から戦つていこうと決意する。さらに「身ごもつて」いるかず子には現実の厳しい試練が待ち受けているに違いない。「みごもつて、穴を掘る蛇の姿」は、かず子自身の姿でもある。したがって「自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに變つて行く」ことに暗示されているように、生きていくためには賢さ以上の「悪がしこ」さを求めざるをえないのである。蛇は穴を掘つて住み家を確保し、冬眠の準備をする。それから新たな出発に向かって脱皮が行われる。かず子も母と死別し、出産することで、新たなしかも厳しい現実を生きていこうとする。かず子は自分を蛇に同一化することで、蛇のように「悪がしこい生きもの」として、また独

身の母として社会的な偏見や非難、差別などと戦つていこうとするのである。

### 3 聖書と蛇

上原に対する「恋」をめぐる事柄や手紙においては、主に聖書のなかの蛇の言説が用いられている。かず子の上原宛の手紙は聖書のなかの蛇のイメージで覆われているといつてよい。自分の生きる道として、かず子が上原に「私の恋」を訴える手紙を書く触媒になっているのが聖書の言葉であつた。

お手紙、書かうか、どうしようか、ずいぶん迷つてゐました。けれども、けさ、鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧かれ、といふイエスの言葉をふと思ひ出し、奇妙に元氣が出て、お手紙を差し上げる事にしました。直治の姉でございます。お忘れかしら。お忘れだつたら、思ひ出して下さい。(略)私のいまの生活は、それ以上におそろしいもののやうな気がして、M・Cにたよる事を止せないのです。鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧く、私は、私の恋をしとげたいと思ひます。(七八—八二頁)

「鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧く」は、聖書のマタイ伝によるもので、この物語のなかに四回も繰り返されている。ここから

「恋」の相手としての上原に対するかず子の態度をうかがうことができる。

聖書における蛇は最初から最後まで反キリスト的存在として登場し、否定的な存在の凝り固まりを意味し、狡賢さが主な特徴とされ、神の呪いを受ける存在である。<sup>(11)</sup>しかし一度だけイエスは弟子たちに蛇を賢明さの象徴として差し出している。そこで「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」と説かれる。<sup>(12)</sup>かず子に「恋」の勇気を与えてくれたこの言葉には、物事に対する素直さや純粹さとともに処世における賢明さ、さらに悪賢さをさえ容認することが含まれている。最初の手紙について「こなひだ差し上げた手紙は、とてもずるい、蛇のやうな奸策に満ち満ちてゐ」て、「本当に、私はあの手紙の一行々に狡智の限りを尽くしてみた」と告白するかず子の言葉がその意味をよく語っている。「私の恋をしとげたい」という思いは、「非常にずるくて、けがらはしくて、悪質の犯罪でさへあるかも知れ」ないと告白しながらも、かず子はその「恋」を積極的に進めていく。

「けふ、私、東京へ行つてもいい? お友だちのところへ、久し振りで遊びに行つてみたいの。二晩か、三晩、泊つて来ますから、あなた留守番してね。お炊事は、あのかたに、たのむといいわ。」

直治の弱味にすかさず附け込み、謂はば蛇のごとく慧く、私にはバッグにお化粧品やパンなど詰め込んで、きはめて自然に、あのひとと逢ひに上京する事が出来た。(二二七頁)

これは返事を待ちきれなくなったかず子が、直接上原に会うため、伊豆の山荘を立つところである。かつては直治の薬代のために自分の宝石を売り尽くし、結婚生活さえも危うくしたかず子であったが、今度はその直治の弱みにつけこみ、「謂はば蛇のごとく慧く」と、直治を押しつけ、「恋」のために東京へ向かうのである。しかも自分の行為を「きはめて自然に」と語るかず子は、そのような自分の狡賢い行為をきわめて自覚的に行っていることがわかる。

「マタイによる福音書」は、イスラエル各地に宣教師として十二人の侍従を派遣するに当たって、彼らに心構えとして教えた言葉で構成されている。しかし、ここでかず子はそのような聖書の意味合いでこの言葉を持ち込んでゐるわけではない。<sup>(13)</sup>ただキリストの「愛」の代わりに上原への「恋」をすり替えることで自分をキリストの侍従たらしめているといえよう。また侍従たちの宣教における言動の方針として与えられた教えをもって、上原との「恋の成就」のための自分の言動を正当化している。そしてその「恋」すら、かず子の思惑を孕んだ一つのたくらみとして働くようになるのである。

二

1 装置としての恋

この小説の中には出来事を体験するかず子と、それを回想して手記として書き綴る現在のかず子が存在する。かず子が出来事を規定し、語ることができたとき、その出来事は再びかず子の内面を規定するように働く。つまり体験するかず子とそれを語るかず子とは、互いに規定しあう関係を持ち、それによってかず子が変貌していくのである。

かず子の「恋」を考えると、語りの問題は重要である。△出来事▽と△語り▽との二分法的な断絶を指摘する榊原智氏<sup>(14)</sup>は、その両者の連続性を見だし、固定した語り手が消滅する「連続的な差異化運動」として『斜陽』の構成法を読みなおしている。しかしかず子の「恋」を考えると、「連続的な差異化運動」を読みとるだけでは説明しにくいのである。「連続的な差異化運動」という理論化によっては、かず子の「恋」も「道德革命」も取り落とされてしまうからである。かず子の「恋」が手記を書いていく過程で生成されたのは確かなことだが、ここで私が注目したいのは、その差異化運動のベクトルがどこを向いているのかである。

「恋」という言葉が最初出てくるのは第一章の最後、「恋」と書いてら、あと、書けなくなつた」と「恋」が名詞形で語られる。そし

てその次は第二章の終わりのところで、「だんだん、或るひとが恋ひしくて、恋ひしくて」と、「恋ひしい」という述語だけが出ており、この段階ではまだその「恋」の対象は不明である。

直治の帰還で将来の行方が問題になったかず子は、家出を迫られ、「私には、行くところがあるの」といつてしまう。「言葉が別の生き物のやうに」自らの口から出てしまい、かず子はその「いくところ」に途方にくれ、「ひめぐと」を言い出すようになる。その「いくところ」の根拠を母から問われ、かず子は実行を迫られる。そのようにして「或る人が恋ひし」という心が生み出されてゆくのである。

第三章の上原との初対面においても、上原に対して恋とはかけ離れた「奇獣」、「へんな初印象」などの言葉で語られており、それと「恋」とは結びつけにくい。これについては上原宛の手紙のなかで「六年前のある日、私の胸に幽かな淡い虹がかかつて、それは恋でも愛でもなかつた」と、かず子が告白している通りである。

その頃の私は、いまの私に較べて、いいえ、較べものにも何ならぬくらゐ、まるで違つた人みたい、ぼんやりの、のんき者ではあつたが、それでも流石に、つぎつぎと続いてしかも(略)上原さんは、お部屋でひとり、新聞を読んでゐた。

縞の衾に、紺緋のお羽織を召してゐらして、お年寄りのやうな、

お若いやうな、いままで見た事もない奇獣のやうな、へんな初印象を私は受取つた。(七二頁)

しかしかず子は、蛇と同質感を抱き、その野性的な生命力を高めることによって、またその狡賢さをもって生きていくことをもできるようになった存在である。だからこそかず子は上原宛の手紙を書くことに踏み出すこともできたのである。この三通の手紙によって、はじめて上原との関係性が「恋」の言葉をもって規定されていく。

かず子の一通目の手紙は上原の「お指図」をいただきたいことから書きだす。そして「或るお方に恋をしてゐ」て、「そのお方の名前のイニシャルは、M・C」であることをうち明けていく。最初、かず子は自分の「恋」の相手を上原とは区別して「或るお方」と言いながらも、「そのお方は、あなたもたしかご存じの筈です。」「M・Cには、あなたと同じ様に、奥さんもお子さまもごさいます。」「六年前の或る日、私の胸に幽かな淡い虹がかかつて」と、その相手が上原本人であることを次第に暗示していくのである。

けれども、かんじんのM・Cのはうで、私をどう思つてゐるつしやるか。それを考へると、しよげてしまひます。謂はば、私は、押しかけ、……なんといふのかしら、押しかけ女房といつてもいけないし、押しかけ愛人、とでもいはうかしら、そん

なものなのですから、M・Cのはうでどうしても、いやだといつたら、それつきり。だから、あなたに願ひします。どうか、あのお方に、あなたからきいてみて下さい。(八一頁)

しかしこの一通目の手紙において、かず子は自分の行為に対してそれが「押しかけ」の行為であることは認識できていても、その次の言葉を結びつけられず、「女房」と「愛人」とのあいだで揺らぎを見せており、この段階では未だ自己規定をしきれないままである。また自分の「恋」にたいしても、その成り行きはもっぱら「そのお方」にかかっていることで、その相手の意向をうかがうということに止まっている。しかしこの手紙に上原からの返事が来ない。そこでかず子は二通目の手紙を出すことになる。二通目と三通目の手紙は一通目より量的にも二倍の長さをもっているが、それは何とかして上原を説得したいかず子の焦燥感からであろう。かず子は最初の手紙が「蛇のやうな奸策に満ち満ちてゐたのを」告白し、その「恋」の相手が上原本人であることをはっきりと打ち出す。

結局、私はあなたに、私の生活をたすけていただきたい、お金がほしいといふ意図だけ、それだけの手紙だと思ひになつた事でせう。さうして、私もそれを否定いたしませぬけれども、しかし、ただ私が自身のパトロンが欲しいのなら、失礼ながら、

特にあなたを選んでお願い申しませぬ。他にたくさん、私を可愛がつて下さる老人のお金持などあるやうな気がします。げんにこなひだも、妙な縁談みたいなものがあつたのです。(八二―八三頁)

上原からの返事がないため、その気持ちに全く分からないかず子は、自分の手紙を反省・分析し、同時にその手紙に対する上原の可能な限りの解釈を想定しながら書き進めるしかない。そしてかず子は自分の身の回りにおける障害を取り除くことによって、上原を誘っていく。最初の手紙において、没落した華族として「いまの生活」からの救いをもとめたかず子の「押しかけ」は、妻子をもつ上原からすると、当然経済的なことを考えざるを得ない。そこでかず子は「パトロンが欲しいの」ではないことと、ほかに自分には「縁談」がたくさんあることを知らせ、自分にとって上原が特別の存在であることを強調する。さらにかず子は「世間普通のお妾」と自分を差別化し、「二人が仲よくする事が、お仕事のためにもいい」「奥さまも、私たちの事を納得して」くれるはずと、それこそ「こじつけの理窟」をならべ、自分は上原に負担になる存在でないことを知らせようとする。その一方、「あなたは、小説ではずいぶん恋の冒険みたいな事をお書きになり、世間からもひどい悪漢のやうに噂をされてゐながら、本当は、常識家なんではう。」には、上

原を逆に刺激し自尊心を奮いたたせようとするかず子の策略が見られる。

このような執拗なほどの態度の一方、かず子は「あなたからの御返事が無ければ、私、押しかけようにも、何も、手がかりが無く、ひとりではんやり痩せて行くだけではう。やはりあなたの何かお言葉が無ければ、ダメだったんです。」と、すべてはあくまでも上原にかかっているという念押しのお説の「とほり」と、上原が皮肉な批評を対して「おめえの手紙のお説のとほり」と、上原が皮肉な批評をしたのも、このようなかず子の用意の周到さを感じ取ったからのことであろう。これほどの手紙を書き送り、「毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしてゐるのに」、またも上原の返事は来ない。所詮最初から手紙はかず子の一方的なものでもあったが、いよいよかず子は三通目の手紙を書くしかなかった。

けふも雨降りになりました。目に見えないやうな霧雨が降つてゐるのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしてゐるのに、たうとうけふまでおたよりがございませんでした。いつたいあなたは、何をお考へになつてゐるのではう。こなひだの手紙で、あの大師匠さんの事など書いたのが、いけないかつたのかしら。こんな縁談なんか書いて、競争心をかき立てようとしてゐるやがる、とでもお思ひになつたのでせうか。でも、



あの縁談は、もうあれつきりだったのです。(九〇頁)

これは三通目の手紙の始まりである。二通目の終わりで「雨があがつて、風が吹き出しました。」と、書いていたかず子は、ここではそのような心の余裕などは見られず、かず子は「目に見えないやうな霧雨」のなか、陰うつな日々を過ごしている。「渦を巻きつつ吹かれて行く霧雨を眺めながら、」上原の「お気持の事を考へて」見たりする。しかし上原からの返事のない故、その「お気持の事」を知るすべのないかず子の不安と焦燥は深まるばかりである。「霧雨」はこのようなかず子の心象風景をあらわしているのである。かず子は「縁談なんか書いて、競争心をかき立てようとし」たことに反省ぶりを見せながらも、一方では「逢へばいいのです。もう、いまは御返事も何も要りません。お逢ひしたうございます。私のほうから、東京のあなたのお宅へお伺ひすれば一ばん簡単におめにかれるのでせうけれど」と、上原へのそれこそ強引な「押しかけ」をもほのめかし、伊豆訪問を強く要請する。つまり「恋」をめぐる二人の関係において、かず子は上原の意向を求め、それに従うかのように見せているが、じつはいかず子は積極的に上原を誘い、リードしているのである。そして手紙が重なるにつれ、かず子の上原への「恋」の思いもエスカレートしてゆくようにみえる。

しかし所詮、かず子の上原への思いは虚構によって組み立てられ

たものであり、必然的に現実とずれをもっている。手紙を書いている現在のかず子は、六年前上原と一回逢ったきりで、上原に対してそのときの印象を開陳する機会をすらもっていない。

あなたを、すきでもきらひでも、なんでもなかつたのです。そのうちに、弟のお機嫌をとるために、あなたの著書を弟から借りて読み、面白かつたり面白くなかつたり、あまり熱心な読者ではなかつたのですが、六年間、いつの頃からか、あなたの事が霧のやうに私の胸に滲み込んでゐたのです。あの夜、地下室の階段で、私たちのした事も、急にいきいきとあざやかに思ひ出されて来て、なんだかあれば、私の運命を決定するほどの重大なことだつたやうな気がして、あなたがしたはしくて、これが、恋かも知れぬと思つたら、とても心細くたよりなく、ひとりでめそめそ泣きました。(八七―八八頁)

最初、かず子は弟を葉中毒から「アルコールのはうへ転換」するために、酒と上原のほうに弟を接近すべく、弟の師匠の「上原をほめて」いく。それにたいして弟は「とてもうれしうに、ぢやあこれを読んでごらん、とまた別の上原さんの著書を私に読ませ、そのうちに私も上原さんの小説を本気に読むやうになつ」たのである。こうして六年にかけて、かず子のなかに上原のことが次第に浸透し



てきたのだという。ここで注目したいのは、かず子にとって、上原のイメージは彼の小説や噂などにより組み立てられている点である。このような制約からかず子の上原への「恋」は想像的な要素が強いと考えられる。また直治により上原の小説を読まされたことから、上原に対して関心をもったのは、かず子の自発的な行為からではなかったことがわかる。再会の場面には上原に対する自分の想像と現実との落差に気づいたかず子の驚きと嘆きが赤裸々に語られている。

私は土間に立つて、見渡し、見つけた。さうして、夢見るやうな気持ちになつた。ちがふのだ。六年。まるつきり、もう、違つたひとになつてゐるのだ。

これが、あの、私の虹、M・C、私の生き甲斐の、あのひとであらうか。六年。蓬髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなつており、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅に坐つてゐる感じであつた。(一

三二—三三頁)

過去を回想するかず子の気分は、その回想の対象である過去に被せられることになる。六年前のかず子にとって上原との出会いは「恋でも愛でもなかった」はずだが、後になって「恋かも知れぬと

思」う。かず子は「恋」の手紙の正当化を求めて、上原との初対面の時のことにさかのぼって回想し、それを現在の都合に合わせようとしている。

離婚して戻ったかず子は実家の没落と日増しに減びていく母と向き合い、不安な日々を過ごしており、小説はかず子の唯一の精神の糧になっている。しかもその小説の作者が、弟の師匠で対面したこともあってより身近な存在として、上原に対する想像が自然に増幅していく。そのさなかに自分の生きることの立て直しを迫られたかず子は、次第に上原に対する思いに一つの希望をかけていく。そこからかず子の「恋」物語が始まるのである。そしていったん「恋」という言葉を出してしまつたからこそ、逆にかず子自身がその言葉に制約され、とらわれていくのである。

かず子は一通目の手紙を「恋をしとげ」るための「ご相談」のつもりで書き出しており、その恋の相手はぼやかされている。しかし「お指図」をお願いしたつもりの最初の手紙に上原から返事が来なかったことで、その「恋」の思いは強化されていく。一通目ではただ「恋」の成就という、つまり「恋」自体を求めていたが、二通目になると、その思いは「あなたの子供がほしい」と変容し、自分を上原の子供を身ごもる「母」としての存在と規定するまでになつてゆく。

こひに理由はございません。すこし理窟みたいな事を言ひすぎました。(略) もう一度おめにかかりたいのです。それだけのです。(略) M・C (マイ、チエホフのイニシヤルではないんです。私は、作家にこひしてゐるのではありません。マイ、チャイルド) (九五―九六頁)

三通目の手紙の最後では、「恋」がひらがなの「こひ」と改められている。かず子の上原への「恋」の変質がうかがわれる。また、上京したかず子在上原の家でその妻と話しているところには、自分の「恋」に対して「奥さま」に引け目を感じるかず子の姿があり、そこから居直るかの如くかず子の過剰な言葉は、逆にその「恋」の信憑性を疑わせるほどである。

「ありがとうございました。」

と、ばか丁寧なお辞儀をして、外へ出て、こがらしに吹かれ、戦闘、開始、恋する、すぎ、こがれる、本当に恋する、本当にすぎ、本当にこがれる、恋ひしいのだから仕様が無い、すぎなのだから仕様が無い、こがれてゐるのだから仕様が無い、あの奥さまはたしかに珍らしくいいお方、あのお嬢さんもお綺麗だけれども私は、神の審判の台に立たされたつて、少しも自分をやましいとは思はぬ、人間は、恋と革命のために生れて来たの

だ、神も罰し給ふ筈が無い、私はみぢんも悪くない、本当にすぎなのだから大威張り、あのひとに一目お逢ひするまで、二晩でも三晩でも野宿しても、必ず。(二三〇頁)

その夜、六年ぶりに再会した二人は一夜を共に過ごしたが、かえってかず子の「恋」は消え失せる。「私のその恋は、消えてゐた」と、かず子の語る「その恋」とは、かつてかず子の思い描いていた上原への「恋」が相対化されているように感じられる。

「泊るところが、ねえんだろ。」

と、上原さんは、低い声でひとりごとのやうにおつしやつた。

「私？」

私は自身に鎌首をもたげた蛇を意識した。敵意。それにちかいい感情で、私は自分のからだを固くしたのである。

「さこ寝が出来るか。寒いぜ。」

と上原さんは、私の怒りに頓着なく呟く。(二三九―一四〇頁)

それほど待望していた上原と再会したかず子は、自分の内面に「鎌首をもたげた蛇を意識」し、「敵意」さえ感じている。この「蛇」には目的を達成し、自分の強さをアピールするかず子の姿が

重ね合わされている。これは「蛇」化したかず子の凝縮された心象風景であり、これまでの「恋」をめぐるかず子の言葉のすべてを一気に覆いつくすほどの強烈さがある。したがってかず子の「恋」という言葉とその実体との乖離<sup>(15)</sup>はもともと避けられないことであったといえる。

このようなかず子の「恋」は「かなしい、かなしい恋の成就。」にしかならないことは明白で、かず子は自分の「恋」の「冒険」そのものにこそ、その「成就」の意義をもたせているのである。華族の娘であるがゆえに、恋も知らないまま結婚をさせられたかず子からすると、妻をもつ上原への「恋」は「冒険」であり、「革命」的意味をもっているといえよう。また、その「恋」には子供がほしいというかず子の願望が潜んでいることを考えると、なおさらである。

## 2 母になりたい願望

これはかず子と母との日常の場面である。

「略」それに、お庭の薔薇のことだつて、あなたの言ふことを聞いてゐると、生きてゐる人の事を言つてゐるみたい。」

「子供が無いからよ。」

自分でも全く思ひがけなかつた言葉が、口から出た。言つてしまつて、はつとして、まの悪い思ひで膝の編物をいぢつてゐ

たら、

——二十九だからなあ。

さうおつしやる男の人の声が、電話で聞くやうなくすぐつたイバスで、はつきり聞えたやうな気がして、私は恥づかしさで、頬が焼けるみたいに熱くなつた。(五七頁)

無意識に出てしまつた子供のことは、かず子自身「思ひがけなかつた言葉」であるがゆえに、後にも深い気になりになって、再び「子供が無いからよ、なんて自分にも思ひがけなかつたへんな事を口走つて、いよいよ、いけなくなるばかり」と反芻する。死産の経験のあるかず子に死児への悲しみと子供をもちたい願望が潜んでいることをうかがわせる場面である。焼かれた「蛇の卵」の母蛇の様子を「物憂げ」と受け取っていることも、死児をもつ母としての同質感の上でのことであつた。また母の臨終のとき、かず子の思い描いた「みごもつて、穴を掘る蛇の姿」は、一つの心象風景として、母の死後に子供といっしょに生きていきたいという、かず子の強い決意がうかがわれる。このようなかず子の子供がほしいという願望は三通の手紙のなかに、はつきりとあらわれている。

私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉の葉が散らないで腐つて行くやうに、立ちつくしたままおのづか

ら腐つて行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。

それで、私、あなたに、相談いたします。

私は、いま、お母さまや弟に、はつきり宣言したいのです。

私が前から、或るお方に恋をしてゐて、私は将来、そのお方の愛人として暮らすつもりだといふ事を、はつきり言つてしまひたいのです。そのお方は、あなたもたしかご存じの筈です。

(八〇頁)

最初の手紙でかず子は上原を「恋」の相手ではなく、相談の相手として設定している。自分の内部に「蛇」のような本能的なものを自覚し、それを生命力として内在化しているかず子は、「自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉の葉が散らないで腐つて行くやうに、立ちつくしたままおのづから腐つて行くのをありありと予感せられるの」を恐怖し、その脱出口を探し出す。その出口としてかず子の手紙があり、上原への「恋」があつたのである。最初の手紙で、上原を相談役として関係づけると同時に、かず子が打ち出した方針とは、「将来、そのお方の愛人として暮らすつもりだといふ事」である。ここで「愛人になりたい」ではなく、「愛人として暮らす」と表現していることに、かず子の現実認識が示されている。すなわ

ちかず子は「……になりたい」という曖昧な希望の言葉ではなく「……として暮らす」という、より端的で具体的な言葉を使っている。「日常生活」「いまの生活」のほか、「中年の女の生活」「お婆の生活」「いい生活」「人間の生活」などの言葉が目立つのもそれとかわつてゐる。最初の手紙ではもっぱら「恋」を求めていたのが、二通目では「あなたの赤ちゃん」を求める相談にずれていく。

私には、常識といふ事が、わからないんです。すきな事が出来さへすれば、それはいい生活だと思ひます。私は、あなたの赤ちゃんを生みたいのです。他のひとの赤ちゃんは、どんな事があつても、生みたくないんです。それで、私は、あなたに相談をしてゐるのです。おわかりになりましたら、御返事を下さい。(八九頁)

かず子は自身を「押しかけ愛人」から「中年の女の押しかけ」へと規定し直している。ここで「中年の女」とは、男女関係に基づいた、性的な匂いのする「愛人」に較べて、成熟した人間のイメージの強い言葉である。来年で三十になるかず子は、自分を「からだの乙女の匂ひが次第に淡くうすれて行つた」「まづしい、中年の女。」と、是認するが、「でも、中年の女の生活にも、女の生活が、やつぱり、ある」ことにも自覚的である。だからこそ、かず子は「私の

口の両側に出来た幽かな皺を見て下さい。世紀の悲しみの皺を見て下さい」と、強く訴える。女性にとって皺は普段若さを失う老いの現象と見なされ、とくに恋する異性には隠すべきものとされる。が、逆にかず子はそれを堂々たる態度で見せようとしており、その「皺」にある種の自負さえもっているかに見える。すなわちかず子においては娘のような若さよりも中年の女性としての成熟さが大事であったからであろう。一通目の追伸の「私は、このごろ、少しづつ、太つて行きます。動物的な女になつてゆくといふよりは、ひとらしくなつたのだ」という言葉も同じ脈絡で理解できる。

かず子は上原との再会のために上京するとき、聖書の言葉から力を得ているが、イエスの愛がかず子の「恋」にすり替えられたかのようにみえる。ここでは「恋」と「愛」とが善悪の次元で対立化されている。

#### 戦闘、開始。

もし、私が恋ゆゑに、イエスのこの教へをそつくりそのまま必ず守ることを誓つたら、イエスさまはお叱りになるかしら。

なぜ、「恋」がわるくて、「愛」がいいのか、私にはわからない。

同じもののやうな気がしてならない。何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身と靈魂とをゲヘナに滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいの

だ。(一二六頁)

本来「恋」と「愛」は善悪で対立するものではない。ここにかず子の上原への「恋」の思惑が暗示されているように思われる。恋の対象が主に男女間のことであるのに対し、愛は異性に限らず人間や自然などもっと広い対象をもつ<sup>(16)</sup>。子供をほしがるかず子が「愛」を否定し、「恋」にこだわることは、異性としての上原へのこだわりと関わっているのではあるまいか。そしてその「恋」のためにかず子は「身と靈魂とをゲヘナにて滅し」ていくことを宣言するのである。

二通目のなかの「あなたの赤ちゃんを生みたい」という平叙文が、三通目では「あなたの子供の母になる事」と、より自己規定性の強い私たちの名詞止めの文にかわっている。また自分に対してはじめて「母」という言葉を与えており、いっそう自己規定の明確さが増してくる。これは最初の手紙で「謂はば、私は、押しかけ、……なんといふのかしら」と、その次の言葉をめぐって、「愛人」と「女房」のあいだで揺らぎをみせていたかず子の態度とは対照的である。

さいしよに差し上げた手紙に、私の胸にかかつてゐる虹の事を書きましたが、その虹は蛍の光みたいな、またはお星さまの

光みたいな、そんなお上品な美しいものではないのです。(略)  
間違つてはゐない、よこしまではないと思ひながらも、ふつと私、たいへんな、大馬鹿の事をしようとしてゐるのではないかしら、と思つて、ぞつとする事もあるんです。発狂してゐるのではないかしらと反省する、そんな気持も、たくさんあるんです。でも、私だつて、冷静に計画してゐる事もあるんです。

(略) 私の望み。あなたの愛妾になつて、あなたの子供の母になる事。(九四―九五頁)

かず子の「虹」が「お上品な美しいものではない」ところに、かず子の「恋」の思惑がある。その思惑は、かず子が自責の念を抱いたにしろ、最初から「冷静に計画してゐる事」には間違いないのである。子供を産んで「母になる事」、これこそがかず子の「恋」の目的であり、「恋の冒険」であつたといえよう。かず子の「冷静に計画してゐる」ということから、かず子の手紙がきわめて戦略的なものであつたことがわかる。かず子にとって大事なのは子供の母になることであり、かず子の「恋」は自分の子供を産みたいという願望に起因しているといえる。その後、「恋」はひらがなの「こひ」と綴りがかわつており、その意味の転換がなされている。

かず子については上原からの返事をもらうことはなかった。「悽愴の思ひに襲はれた」かず子は、今度こそ上原に会うため「ひそかに

上京の心支度をはじめたとたんに、母の病気が悪化する。しかし母の看病のなかでもかず子は「私の計画も大輪の菊のやうに見事に咲き誇る事が出来るかも知れない」という希望をもっており、その気持ちは強くなつていくばかりである。母の看病中、かり寝をするかず子は、「森の中の湖のほとり」で「和服の青年」と会う夢を見る。夢ではすでに母は「お墓の下」にいる。その「和服の青年」には、六年前の「縞の袷に、紺緋のお羽織」姿の上原が暗示されている。この夢には母の死後のかず子の様子が投影されているのである。

さらに「M・C」のイニシャルにおいては、一通目の手紙で「マイ、チェホフ」であつたのを、三通目では「作家にこひしてゐるのではない証として「マイ、チャイルド」と、見事に読み直してみせるかず子の態度は、かず子の求めているのが作家の上原ではなく子供であることをあきらかに物語っているのではないか。その点において上原をかず子の「八恋<sup>(17)</sup>の犠牲者」と見ることも可能である。

上原との再会の一か月後、かず子は「水のやうな気持で」上原へ最後の手紙を書く。この「水のやうな気持」とは、自分の「恋の冒険」を成し遂げたかず子の心象風景であり、すべてを乗り越え、完成した満足感と平静たる心情があらわれている。一方「森の中の沼のやうに静か」という比喻は、生命を孕んでいるかず子の内心に忠実な表現であらう。

「水のやうな気持」と「森の中の沼」には、ともに水のイメージが

共通しており、平明さと落ち着きを感じられる。

私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすぢの恋の冒険の成就だけが問題でした。さうして、私のその思ひが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のやうに静かでございます。(一六四頁)

また、この「森の中の沼」は「へび女房」<sup>(18)</sup>という日本の民話を連想させる。「へび女房」は、女に成り変わった蛇が子供を産む話である。傷ついた大蛇は男に助けてもらい、きれいな女に成り変わって、その男の子供を身ごもる。やがて大蛇の女は出産のときを迎えるが、その出産の光景を男に見られてしまう。禁忌を破られた大蛇の女の、その子供を男に渡して帰った場所が、山の中の沼であった。それからその沼のほとりに、男は子供を連れて、蛇の面会に通うことになる。この民話は、蛇が「水の霊」とされていた民間信仰に支えられているのである。<sup>(19)</sup>「望みどほりに、赤ちやんが出来た」「幸福」な心情を、かず子は「森の中の沼」というイメージに託している。これは、この蛇にかかわる民話を想起させ、また生命を育む場所を象徴的に表しているのである。

この「沼」は母になるという願望を達成したかず子の充満感や安

定感、豊かな生命を孕む場所としての生命の象徴といえる。ここでかず子の願望が露わになり、そのための装置としてかず子の「恋」があったことがわかるのである。

### 三

「女大学」から「太陽」へ

では、独身の母になることは、かず子にとってどんな意味をもつのだろうか。病気の母を看護するなか、かず子は自分の青年期を「更級日記の少女」という言葉をもって回想している。

あれは、十二年前の冬だった。

「あなたは、更級日記の少女なのね。もう、何を言っても仕方が無い。」

さう言つて、私から離れて行つたお友達。(略)あれから十二年たつたけれども、私はやつぱり更級日記から一步も進んでゐなかつた。いつたいまあ、私はそのあひだ、何をしてゐたのだらう。革命を、あこがれた事も無かつたし、恋さへ、知らなかつた。いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまはしいものとして私たちに教へ、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、

(略)(一〇九—一二二頁)

これはローザルクセンブルグの本を読んだ後の感想である。ローザルクセンブルグの「経済学入門」から「片端から旧来の思想を破壊して行くがむしやらな勇氣」を読み取り、「奇妙な興奮を覚える」かず子は、それからローザルクセンブルグの「悲しくひたむきの恋」を見いだしている。このような眼を獲得したかず子は、「甘美な物語の本にだつて、革命のにはひがあるの」に気づき、今度は自分のことを反省する。

これまでかず子を社会の現実と遮断していたものは「更級日記」のような貴族性とその少女性であり、自分を自縛していたのが「女大学」であることを自覚するようになったかず子は、その「女大学」を積極的に打ち破ろうとする。

あなたに、御相談してみたい事があるのです。

私のこの相談は、これまでの「女大学」の立場から見ると、非常にずるくて、けがらはしくて、悪質の犯罪でさへあるかも知れませんが、けれども私は、いいえ、私たちは、いまのままでは、とても生きて行けさうありませんので、弟の直治がこの世で一ばん尊敬してゐるらしいあなたに、私のいつはらぬ氣持を聞いていただき、お指図をお願いするつもりなのです。

(略) 私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭

蕉の葉が散らないで腐つて行くやうに、立ちつくしたままおのづから腐つて行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。(七九)

八〇頁

これは上原宛の最初の手紙であるが、かず子は自分の手紙が「女大学」的な「いまの生活」から抜け出すための「相談」であることをはつきりとうち明ける。妻をもつ上原に「恋」の手紙を出すこと自体が、「女大学」という「旧来の思想」を破壊する行為であり、既述したように、母になりたいとかず子の願望を満たす手段として、この手紙があるとすれば、それは「悪質の犯罪でさへある」のである。この「女大学」が括弧付けて記されていることから、かず子がそれを強く意識していることがわかる。「女大学」とは、江戸時代、家族制度の確立期に出現し、明治初年代から昭和の敗戦まで、女子教育書として機能していた代表的な教訓書である。それは家父長的な家族制度の存続や補強をはかるもので、良妻賢母主義の教育政策として、それまで女性の倫理道德の根幹をなしていた。<sup>(20)</sup>「蛇」のもつ野性的な強い生命力を内在化したかず子は、「火事」の事件や「筋肉労働」などさまざまな経験をとおして、自分の内部にある「おひめさま」、「更級日記の少女」的な素質を自覚することが



できたのである。そしてこれまでの「女大学」的な生き方を積極的に否定していくための第一歩として、かず子の手紙は位置づけられる。

じっさいに「芸術院とかの会員」で「大師匠のひと」との再婚話を持ち込まれたとき、かず子はそれをきっぱりと断ってしまう。「精神的」な「幸福」ではなく「物質的」な「幸福」への充足を強調する「師匠さん」に、「私、子供がほしいのです。幸福なんて、そんなものは、どうだつていいのです。お金もほしいけど、子供を育てて行けるだけのお金があつたら、それでたくさんですわ。」といったとき、かず子は社会的にも経済的にもすべてが保証されるはずの「老人のお金持」との再婚を拒否したことになる。それは同時に家父長的な家族制度を支えている「女大学」的な生き方をも拒んだのである。

けれども私は、これまでの第一回戦では、古い道徳をわづかながら押しつけ得たと思つてゐます。さうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかふつもりであるのです。

こひしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。(一六五頁)

私生児とともに母子だけの家族を築こうとするかず子は、これから「生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたか」わなければならぬ。またかず子と一緒に戦つていくためには「よい子」が求められる。その「よい子」のために、その相手はかず子のように既存の倫理道徳から自由な精神の持ち主であることが要求される。同じく芸術家だけれども「芸術院とかの会員」で、社会によく順応している人よりは、伝統的な道徳の反抗者とされている上原のほうが理想的であつたらう。したがって「女大学」的な一夫一妻の結婚生活を積極的に否定し、子供と母だけの母子家族を築くことは、家の没落と離婚の経験をもち、社会の弱者側に立たされた一人の女、かず子にとっては、最大の「革命」に違いない。

家父長制度下の社会において、独身にして子を求めるかず子にとって、その生活はけつして容易なことではない。また、私生児は社会的な偏見や倫理的な非難、差別の対象とされてしまう。かず子はこのような困難な社会状況を直視しながら、勇気をもってそれに挑むのである。

「万葉や源氏物語の頃だつたら、私の申し上げてゐるやうなこと、何でもない事でしたのに。」とは、上原の子供をほしがることに對する、かず子の自評のような言葉である。たしかに古代の日本における婚姻形態は通い婚<sup>2)</sup>であつた。それをかず子は知っているのである。じっさいその時代には、夫が妻の家に通う一夫多妻制が普通で

あつて、父親不在の母と子供だけの家族において、母は生産者の代表として家族の経済を取り仕切り、子供の命名、育成までつかさどつたのである。これから独身の母になるかず子は、子供を育て、家族の経済をも支えていかなければならない。「女大学」が日本の近代化の過程で家父長制度下の女性に課せられていたものだと思えば、かず子の「道德革命」は、そのような倫理道德に真っ向から対立するものである。

「古い道德を平氣に無視して、よい子を得た」ことで、かず子の「恋の冒険の成就」が達成され、「第一回戦」は終わるのであるが、なお子供を出産・養育し、母子家族を築いていくまで、すなわち「革命の完成」は来ない。したがってかず子は「第二回戦」からは、子供とともに「太陽のやうに生きる」ことを宣言するのである。

私生児と、その母。

けれども私たちは、古い道德とどこまでも争ひ、太陽のやうに生きるつもりです。

どうか、あなたも、あなたの闘ひをたたかひ続けて下さいまし。

し。(一六五頁)

普通、たくましく生きていく人間は、同じ生き物としての動物、例えばライオン、虎、豹などに喩えられる。しかし「太陽のやうに

生きる」という比喩的表現は、そのような常識的枠を越えている。

太陽は自然界のエネルギーの総体とみなされており、また古代民間伝承においては、蛇が太陽の光を好むことから太陽と同一視されたこともある。<sup>(22)</sup> いずれにしてもその両者はエネルギーの強烈さ、生命力の強さの象徴として定着している。

また、かず子の「太陽のやうに生きる」は、「元始女性は太陽であつた」<sup>(23)</sup> という平塚らいてうの名言を想起させる。

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。

偕て、こゝに「青輅」は初声を上げた。

(略) 私共は隠されて仕舞つた我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。

「隠れたる我が太陽を、潜める天才を発見せよ、」こは私共の内に向つての不断の叫声、押へがたく消しがたき渴望、一切の雑多な部分的本能の統一せられたる最終の全人格的唯一本能である。

これは、明治末、婦人解放の新思想を打ち出した平塚が、女性たちの自覚を促すために送った長文のメッセージであつた。これがき

っかけになって明治末、大正にかけて、家父長制度下の諸価値観や良妻賢母主義の生き方を否定する「新しい女」<sup>(24)</sup>が出現してくる現象が起こるのである。

かず子の手記は敗戦の翌年の昭和二十一年四月から書き出され、その翌年の二月頃で終わっている。しかしかず子は敗戦後、土地改革、男女の被選挙権の認定などの選挙法の改正が行われる社会的状況の真ん中を生き、また手記を書くあいだにも、主権在民、基本的人権尊重と男女同権などが盛り込まれた画期的な新憲法が公布される。さらに不敬罪や姦通罪の廃止、家族制度の全面的な否定などが盛り込まれる、翌年の改正刑法の公布に向かっての議論<sup>(25)</sup>など、社会の激しい変革が起っていた。

このような社会的な背景のなか、離婚と死産を経験し、貴族から没落した実家にもどってきたかず子は、恋にだけではなく、「恋と革命」に自らの生きる道を開いていこうとしたのである。したがってかず子の「道徳革命」は、「女大学」で象徴される家父長制度的な旧倫理道徳から脱皮し、母子家族を築き、「太陽のやうに生きる」ことになったと考えられる。

日本の敗戦は、明治以来近代主義の理念を掲げ、長らく進めてきた日本の近代化の破局でもあった。とくに昭和の敗戦にともなう社会の急激な変革期においては、その社会の経済、政治、文化など各方面での力関係の揺れが生じ、価値観の変化や社会的秩序の再編成

が行われた。まさにそのような過渡期に『斜陽』は発表され、「斜陽族」という言葉を流行させるなど、大きな反響を呼んだ作品である。「斜陽族」は敗戦直後の混沌と変化のなかで、滅びの運命を迎えざるを得なかった人々をいう言葉であった。それには時代の陰に埋もれていく貴族たちの鎮魂曲のような『斜陽』の読みがあった。

たしかに『斜陽』のなかで、直治は自殺の寸前まで「僕は、貴族です。」と叫びながら、平民として生きるより、貴族として潔く死ぬ道を選んだ。しかし華族の「おひめさま」的な青年期までの自分を捨てたかず子は、直治とは正反対に「まづしい、中年の女」としてでも、必死に生き延びようとする。同じく貴族でありながら直治とは違って、母は「ほんものの貴婦人の最後のひとり」として、「微笑みを含んで」、美しく滅びていくのである。ただ「田舎の百姓の息子」である上原は、かず子の「革命」に生きる道の踏み台にはなっているものの、みずからその「革命」を受け入れることはできなかった。それゆえ上原は「いのちの黄昏」を迎えざるを得なかったのである。

ここで『斜陽』という題名を考えると、ただ滅び落ちていくことだけが「斜陽」であるとはいえない。<sup>(26)</sup> 莊嚴に沈んでいく「夕日」の美しさが、「最後の貴婦人」として滅びていく母のものであるとすれば、そのような「夕日」の後に昇ってくる「太陽」の逞しさと輝きは、「革命」に生きるかず子の姿であるといえる。

註

本文の引用は、『太宰治全集9』（筑摩書房一九九〇・一〇）に拠った。なお、引用文の傍線は筆者によるものである。

(1) 三好行雄・梶木剛・東郷勝美・渡部芳紀「共同討議『斜陽』をめぐる」『国文学』學燈社 昭和五四・七

(2) 亀井勝一郎「解説」創元社作品集第五卷 昭和二六・五

(3) 奥野健男「斜陽」小論『近代文学』昭和二八・六

(4) 長谷川泉「斜陽」論『国文学解釈と鑑賞』昭和二八・一二

(5) 鳥居邦朗「斜陽」論『作品論太宰治』双文社出版 昭和四九・六 三三六頁、三四五頁

(6) 高田知波「斜陽」論—二つの『斜陽』・変貌する語り手『国文学』學燈社 一九九一・四

(7) 和田季絵「斜陽」『国文学解釈と鑑賞』一九九六・六

(8) 榊原理智「語る行為の小説—『斜陽』の消滅する語り手—」『国文学』三 日本文学協会 一九九七・三

(9) 吉野祐子氏によれば、現世の背後に広大に広がっているのが他界であり、現世はこの他界の投影にすぎない。他界の主が巨大な蛇であって、その分化が現世のさまざまな蛇となっているために、現世に蛇があふれるのである。現世にあふれる蛇はつぎの三種にわけられる。

- 1 祖霊の姿そのものの現実の生きた蛇。
- 2 蛇に見立てられる樹木、山、家屋など。
- 3 仮に人間の姿になっている蛇。

『日本の死生観—蛇 転生する祖先神』人文書院 一九九五・三四—五頁

(10) 鈴木正宗氏は蛇の象徴性について四つを挙げている。その第一は象徴性で、神霊そのもの、ないしはその使いと考えられており、水棲動物とされることから、水を支配・管理するとされ、農耕を基盤とした社会では特に重要視される。第二は媒介性で、蛇が両生類で水界と陸界とを往復する境界的存在であり、海と陸、天と地、男と女、光と闇、乾期と雨期などを媒介するものへと展開する。第三は両義性で、善悪を兼ね、創造と破壊を司るといった対極要素の一致を見ることがある。形状から見ると雌雄の区別が判然としないことから両生具有と見なされ、男性と女性原理を一体化した存在になる。第四は再生観との関連で、脱皮が永遠の若さ、生まれ変わ、不死または長寿といった観念とのつながりを生み出すと言える。第五は動物性で、蛇は野性の力の代表格のように見なされており、人間の内的な野性、力強いエネルギーを呼び起こし、自然との共生感覚を再確認させる存在ともなる。

『日本の神楽における龍と蛇』『アジアの龍蛇—造形と象徴—』アジア民族造形文化研究所編 雄山閣 一九九二・一一 五六—五七頁

(11) 『西洋シンボル事典』八坂書房 一九九四・一〇

(12) 『マタイによる福音書』『新約聖書』日本聖書協会 一九九四 三五頁

(13) 佐古純一郎氏は、太宰の作品には聖書のなかでも「マタイ福音書」からの引用が多いと指摘し、『斜陽』について「作品では、キリスト教は一種の謎めいた要素であって、重要なものではない。キ

リスト教について触れることで、太宰は彼が望んでいたような深み  
を作品に加えることはできなかった」というドナルド・キーン氏の  
見解には一応距離をおきながらも、「私自身も、太宰がその作品に  
聖書を引用するとき、その聖句自体の意味を太宰がどこまで聖書に  
即して正しく受けとめていたか、疑問に思われることがあって少  
なくない」と、聖書の多用と作品内容との関係を述べている。

『マタイ福音書』『太宰治と聖書』佐古純一郎編 教文館 一九八  
三・五 一〇—一三頁

(14) 榊原理智「語る行為の小説—『斜陽』の消滅する語り手—」  
『日本文学』3 日本文学協会 一九九七・三

(15) 高田知波氏は上原との「恋」について「かず子によって叙述さ  
れた『恋の成就』の経過は意図的に『反・恋愛小説』が目指されて  
いるのではないかと思われるほど」といっている。

『斜陽』論—二つの『斜陽』・変貌する語り手』『国文学』學燈社  
一九九一・四

(16) 玉村禎郎氏も「ことばと文字」のなかで、言語と文字の面から  
「恋」と「愛」を考察し、つぎのように述べている。

「『恋』という語は広い意味をもつ『愛』とは違って『充足されぬ  
愛』という側面、『片道の愛』という感じが強い。『相思相愛』とい  
う語は頻繁に使われるが、『相恋』という語はあまり使われないと  
ころからも、そのことは肯定されるであろう。」

『恋のかたち—日本文学の恋愛像』光華女子大学日本文学科編 和  
泉書院 一九九六・一二 二二六頁

(17) 和田季絵氏は「むしろ六年の歳月をかけた△恋△をたった一ヶ  
月であきらめようとするかず子の側が上原を捨てようとしていると

とらえる方が自然だ」といっている。

『斜陽』『国文学解釈と鑑賞』一九九六・六

(18) 「へび女房」『日本の民話』日本民話会編 講談社 一九八三・  
一一 二〇三—二〇四頁

(19) 「湖沼や河川のほとりに生息し、水面を素早く走るさまに、い  
つしか水の精を幻想し、神秘的な存在感を強くもつようになった。  
蛇と日本人との関わりは、すでに縄文時代に始まり器の表面に蛇の  
姿を模刻している。」

金子量重「蛇と龍」『アジアの龍蛇—造形と象徴—』アジア民族  
造形文化研究所編 雄山閣 一九九二・一一 一四頁

(20) 貝原益軒 室鳩巢「女大学について」『日本思想体系』34 岩波  
書店 一九七〇・一一

(21) 暉峻康隆氏は、「万葉や源氏物語の頃」の原始的な一夫多妻婚  
の時代に、「青鞨」の平塚らいてうの「元始、女性は太陽であつた」  
というスローガンの原点を見ている。

『日本人の愛と性』岩波書店 一九八九・一〇 一〇頁

(22) マンフレート・ルルーカ『聖書象徴事典』人文書院 一九八  
八・九

(23) これは、平塚らいてうが明治四四年、女流文芸雑誌「青鞨」の  
創刊に際して、「元始女性は太陽であつた——『青鞨』発刊に際し  
て——」という題で寄せたもので、日本における最初の女性自身に  
よる女性解放宣言として、大きな反響を起こした。またこの言葉は  
大正デモクラシーのスローガンの役割を果たした。

『元始、女性は太陽であつた——平塚らいてう自伝（上巻）』大月  
書店 一九八二・一〇 三二八—三二九頁

(24) 平塚らいてうは『青鞥』の創刊後にも「新しい女」をめぐって多くの論説を次々と発表していくが、大正二年一月号の『中央公論』に「新しい女」という題で、つぎのように述べている。

自分は新しい女である。太陽である。ただ一人である。少なくともそうありたいと日々に願ひ、日々に努めている。

新しい女はただに男の利己心の上に築かれた旧道德や法律を破壊するばかりでなく、日に日に新たな太陽の明德をもって心霊の上に新宗教、新道德、新法律の行われる新王国を創造しようとしている。(略)

新しい女は今、美を願わない。善を願わない。

平塚らいてう『平塚らいてう著作集』第一巻 大月書店 一九八三・六 二五八―二五九頁

(25) 敗戦翌年の夏には、不敬罪と姦通罪の廃止に関する論議が国会で始まり、同年の暮には、日比谷公会堂で姦通罪をめぐる討論会をNHKが開いている。そしてその翌年の昭和二十二年十月、新刑法公布とともに姦通罪は正式に廃止されることになる。

(26) 太宰の他の作品『善蔵を思ふ』(昭和一五・四『文芸』初出)のなかには、「夕陽」が明日の「太陽」の母として讃えられている。

暁雲は、あれは夕焼から生まれた子だと。夕陽なくして、暁雲は生れない。夕焼は、いつも思ふ。「わたくしは、疲れてしまひました。わたくしを、そんなに見つめては、いけません。わたくしを愛しては、いけません。わたくしは、やがて死ぬる身体です。

けれども、明日の朝、東の空から生れ出る太陽を、必ずあなたの友にしてやつて下さい。あれは私の、手塩にかけた子供です。まるまる太つたい子です。」夕焼は、それを諸君に訴えて、さうして悲しく微笑むのである。そのとき諸君は夕焼を、不健康、頹廃、などの暴言で罵り嘲ふことが、できるのであらうか。

○ 太宰治「善蔵を思ふ」『太宰治全集3』筑摩書房 一九八九・一六〇―一六一頁